

チーム北リアス共同代表

人間・環境学研究科

ながたもとひこ
永田素彦 准教授

今月のACADE見ICは、東日本大震災のボランティアネットワーク「チーム北リアス」共同代表の永田素彦准教授にお話を伺った。

チーム北リアス

——チーム北リアスとは

チーム北リアスとは、東日本大震災で甚大な被害を受けた岩手県の北リアス地域の復興を長期的に支援するため、昨年5月に八戸・弘前・関西の有志が立ち上げたネットワークです。今は岩手県の野田村を拠点に活動しています。

——創設の経緯

昨年3月11日に東日本大震災が起こった直後、関西の研究仲間と一緒に何かできることをしたいという話になり、まず現地視察に行くことにしました。この時、重要視したのが「北側からの視察」です。なぜかという、基本的に支援は都心である東京から北上する形で行われやすい。そうすると、北部の支援が手薄になりやすいんです。もう1つの理由は関西チームだけの支援では困難が生じるので、青森の弘前大学にいた研究仲間とタッグを組むためです。困難とはもちろん距離的な問題もありますが、現場で人と接する場面になると文化の違いが想像以上に出るんです。たとえば現地に支援に行ったとして、いきなり関西弁を話す



連中がわんさか現れたら非常に奇異ですよ。そういった問題は地元の人々の協力がないと解決できません。

——現地の状況

3月22日から現地に行き、まず八戸から南下していく中で出会ったのが野田村でした。まるで戦時中のような状況で、市街地の9割が津波で消失していたんですね。こちらがボランティアの受付の人に被害状況を聞くんですが、彼らには外から来た人の対応をする余裕すら無かった。「何か手伝えることはありますか？」と聞けば「ありません」と言われるし、「物資や食糧は足りてますか？」と聞けば「足りてます」と言われる。でも実際はどう見ても足りていないんですね。それで、頼まれたわけでもなく「勝手に助ける」ことにしたんです。その時に八戸で出会った人たちと弘前の仲間たちと「チーム北リアス」を創設することにしました。この「チーム北リアス」という名称には、野田村だけでなくもっと広範にも支援していこうという願いも込められています。

——活動内容

当初はがれきの撤去や側溝の清掃などを行っていましたが、チーム北リアス独自の活動としては避難所回りに力を入れていました。阪神・淡路大震災の時も話題になった「孤独死」を避けたかったんです。仮設住宅に伺って必要な物資を聞く、といった活動をしました。また、炊き出しや青空市のようなイベントも他の団体と協力して行っています。詳しい内容はホームページにも載せています。

——今後の課題

課題の一つは被災地内格差ですね。被害の程度だけでなく、受けている補償の大小で妬みや僻みが起こる。われわれのボランティアも、場合によってはこの格差を助長するものになってしまうんですね。そこは気をつけていきたい。また、我々が便利屋さんみたいになってしまうのは困るんですよね。復興は村の人たちが自分たちで生活を良くしていくものだし、ボランティアにもそういった目的がある。本来の趣旨から外れて、体のいいお手伝いにならないようにしたいですね。

(農・4 スヌーピー)
(とやりたいところだけど生粋のショート派；編)



野田村とは

岩手県九戸郡に属する人口4,600人ほどの小さな村。太平洋に面しており、昨年3月11日の東日本大震災で壊滅的な被害を受けた。死者37名、全壊家屋は300棟以上に及んだ。

現地事務所

壊滅的な被害を受けた被災地では被災地から離れた拠点から支援を行うケースが多かったが、チーム北リアスは村内に現地事務所を作った。

現地事務所は地元の人たちと交流したり、学生ボランティアの宿泊所になったりして、村の人々にチーム北リアスの活動を理解してもらえきっかけにもなった。



ながたもとひこ
永田素彦 准教授

京都大学文学部を卒業し、京都大学大学院人間・環境学研究科博士前期課程修了後、北海道大学文学部助手などを経て京都大学博士(人間・環境学)を取得。2007年4月より京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。社会心理学専攻。

准教授の学生時代

——どんな学生だったか

そりゃもうまじめでしたね(笑)。まじめというのは勉強していたという意味ではないですが。僕が学生をやっていたのは20数年前なんですが、今とだいぶ状況違って、授業に出席していることと、単位が取れていることと、授業を理解していることは全く独立している事象だったんですね。単位を取るだけならそれなりに要領が良ければ取れる、今の学生に言ったら喜びそうな時代でした。だから私は、当時から興味があった社会心理学関係以外の授業にはほとんど出ていませんでしたね(笑)。その代わりに学生時代は京大のオーケストラに所属していて、そっちは本当にまじめに練習していました。

——院進学のきっかけ

私の場合は卒論を書いたことが一つの

きっかけでしたね。先ほど言ったように、当時私はオーケストラの方に没頭していて、卒論を書くまで本当に勉強していなかったんです。それで、卒論を書くために久しぶりに勉強してみると、これが意外と面白い。いろいろと調査のためにアンケートを取ったり、インタビューをして回ったりしてると知的な好奇心が満たされるというか。当時はバブルが崩壊する前で、今みたいに就職の心配は無かったです。だから、なんとなくもう少し勉強してみようかな、と思って院進学を決めました。

そしてこれは余談なんですが、今の私の研究室の隣が全学共通科目で「グループ・ダイナミクス」を担当している杉万先生でして。実は私は院生時代に、杉万先生の下で博士論文を書いていて、本当にお世話になっていました。これは本当に巡り合わせだと思っています。

京大生に一言

本当に一言で言うと「好きにやってくれ」ですね。こう言うのがジジイになったみたいだけど、昔と比べるとしらがみが増えたような気がします。大学院に進まなければ3回生で就職活動をしなくちゃいけないし、授業一つをとっても、昔より締め付けが厳しくなっていると思います。それでも京大生は基本的には頭がいい。もちろん勉強ができるという意味だけでなく、非常にスマートな人が多いと思います。だから良い意味で計算高く自分の好きなことをやってくれるといいですね。制約はいろいろあると思いますが、どこか根本には「やりたくてやる」という気持ちを忘れないでほしいです。あ、あと野田村でのボランティアは募集していますので、興味がある人はぜひ一緒にやりましょう(笑)。

——ありがとうございました。